

テーマⅠ 回顧：日中民間交流の歴史

日中労働者交流協会と中華全国総工会の交流の歴史及び活動

日中労働者交流協会会長 伊藤 彰信



1 全日本港湾労働組合と中国海員工会の交流

私は、全日本港湾労働組合（全港湾）の中央執行委員長を4年前に退任しました。1975年以来、39年間、全港湾の中央本部で働いてきました。はじめに、全港湾と中国海員工会との交流について話をします。

戦時中の1942年11月27日、東条内閣は「華人労務者内地移住ニ関スル件」を閣議決定しました。以来1945年5月までの間に38,935人の中国人労働者を強制的に日本に連行しました。彼らは、鉱山、土木建築、港湾荷役、造船などで、粗末な食事や宿舍しか与えられず、危険で過酷な労働に従事させられました。不幸にして6,830人の方が日本で命を落としました。

1952年12月、中国紅十字会が在日日本人の帰国を呼びかけると、宗教者、在日華僑、労働組合による慰霊運動が起こり、1953年2月に中国人俘虜殉難者慰霊実行委員会が結成されました。同年3月の日本人帰国船の第1船に当時の全港湾委員長であった兼田富太郎が日本代表のひとりとして乗船し、中国を訪問したのが、全港湾と中国の交流の始まりです。1953年7月から中国人俘虜殉難者遺骨送還奉仕団による遺骨送還が始まり、1964年まで9次に渡り2,700柱を送還しました。その遺骨は、現在、天津市の在日殉難烈士勞工記念館に納められています。

私が初めて中国を訪問したのは、1976年6月のことです。全交運の交通運輸労働者訪中団の一員として訪中しました。当時はまだ文化大革命の時代でした。中華全国総工会は存在していましたが、十分に機能していませんでした。北京で訪中団と会見してくださったのは、中日友好協会副会長の張香山先生でした。そのころ、日中労働者交流協会（日中労交）の訪中団を招待してくださったのも中日友好協会でした。

全港湾の第一次訪中団は1972年9月に訪中し、訪中期間中に日中共同声明が出されるという歴史的な体験をしました。以来、全港湾の訪中団は2018年4月までに13次の訪中を重ねています。

中国海員工会の第一次訪日団が日本を訪れたのは1978年11月でした。11月に中華全国総工会第9回全国大会が21年ぶりに北京で開かれ、その直後に訪日団が来日してくださったことを光栄に思っています。訪日団に同行して案内したのが私でした。

2 日中労働者交流協会

1972年の日中国交正常化を受け、当時のナショナルセンターであった総評の各単産と中華全国総工会との交流窓口として、1974年8月に日中労交が結成されました。初代会長は市川誠総評議長、事務局長は兼田富太郎全港湾委員長でした。単産加盟も認めたため、役員に各単産幹部が就任しました。日中労交

日本側報告

は、産別交流の窓口となり、地方にも組織をおき、中央、地方での活動を行ってきました。その主な活動は、中華全国総工会の幹部間の交流と意見交換でした。

連合結成と総評解散の流れの中で、当時同盟側は台湾との交流関係があったため双方とも連合に引き継がないということになりました。そのため、日中労交は、連合が結成された 1989 年に、個人加盟に切り替えて、会の存続を図りました。中華全国総工会と隔年ごとに相互の訪問団を派遣するなど活動を行ってきました。

3 「日中不再戦の誓い」の碑

1985 年 5 月に南京を訪れた市川会長が虐殺犠牲者の発掘作業に遭遇しました。つぎつぎに掘り出される人骨に団員全員、表情は強張り、言葉もありませんでした。そのとき、8 月に侵華日軍南京虐殺遇難同胞記念館が完成すると聞き、市川会長は開館式典に参加することを希望しました。抗日戦争勝利・反ファシズム戦争勝利 40 周年にあたる 8 月 15 日に行われた式典に唯一の外国代表として日中労交から市川会長、山田、平坂の 3 名が参加しました。当初、南京市政府は遺族の心情を考慮して日本人の出席を断りましたが、出席を懇願した市川会長が「誓い」を起草し、やっと許可されたというエピソードがあります。

市川会長の死後、吉岡会長が、「誓い」の碑を南京虐殺遇難同胞記念館に建てようと呼びかけ、多くの労働組合、労働者からのカンパを集めました。吉岡会長は、2005 年に亡くなりましたが、中華全国総工会、記念館と話し合いを続け、「誓い」の碑の建立が決定しました。2009 年 12 月 13 日、南京虐殺遇難同胞記念館において「日中不再戦の誓いの碑」の除幕式を行いました。碑文は、資料のとおりです。日本語、中国語、英語の 3 ヶ国語で記されています。

4 日中労働情報フォーラムの結成

日中労交は、会員の高齢化がすすみ、財政力も乏しくなり、中華全国総工会の訪日団を受け入れることが困難になってきました。また、「日中不再戦の誓いの碑」の建立後、活動の求心力を失ってしまいました。

私は、吉岡会長が存命の時に「このままでは日中労交は消滅してしまう。是非、青年訪中団を組織してほしい」と提案しましたが、吉岡会長は「日中労交は幹部交流でよいのだ」といつて聞き入れてくれませんでした。そこで私は、全港灣の青年訪中団を組織し、南京虐殺遇難同胞記念館を訪問しました。2005 年 5 月のことです。

中華全国総工会は、①総工会の交流対象を各国ナショナルセンターにする、②日本の場合は産別交流が行われているので、それは継続する、③「井戸を掘った人」は大切にするが、「井戸を掘った後の人」との交流は普通のレベルにすることを伝えてきました。ただし、記念すべき節目の年には中国側が招待するというものです。日中共同声明 40 周年の 2012 年、中華全国総工会の招待による日中労交の訪中は終了しました。

私は日中労交の解散を提案したのですが、古くからの会員は解散に大反対でした。しかし、先輩たちは、具体的な活動方針を提案しないので、私は、労働組合幹部だけでなく中国の労働問題に関心を持つ、学者、弁護士、市民運動家にも参加してもらうことにし、今までの活動を若い世代に伝えていくため、労働運動活動家からもうひとつ枠を広げた組織として「日中労働情報フォーラム」を 2013 年 6 月に新たに設立しました。日中労働情報フォーラムは、幅広く、中国における労働者の状況、労働運動の状況、日本における中国人労働者の状況などに関する情報を収集、交換、共有し、中国労働者に関する理解を深める

ことによって、日中労働者階級の友好と連帯をはかることを目的にしています。

5 新しい日中労交の活動

日中労交は、枠を広げ、新しく生まれ変わりました。2014年に訪中した際、中国側の受け入れ窓口が中国職工対外交流センターになることを知らされました。

日中労働情報フォーラムは、2015年に映画「ジョン・ラーベ」の自主上映を行いました。中国では「ラーベ日記」というタイトルで大ヒットした映画ですが、日本では公開されていません。上映会は大盛況でした。中国のテレビでも報道されました。

また、学習会を適宜開催しています。2015年10月に復旦大学副教授の張浩川先生を招いて講演会を開催し、中国に進出している日本企業にも案内を出しましたが、まったく反応がありませんでした。それ以来企業は意識せず、中国敵視政策をとっている安倍政権を批判する活動に重点を置くようにしました。

安倍政権は、2014年に今まで憲法違反だとされていた集団的自衛権の行使を合憲とする閣議決定を行い、2015年には「安保法制」を成立させました。「我が国を取り巻く安全保障環境は、一層厳しさを増している」とは、安倍首相の常套句です。「安全保障環境を厳しく」しているのは安倍本人だと思いますが、多くの日本国民は「中国脅威論」を信じ込んでいます。この日本国民の意識を変えなければならないと考え、思い出したのが中国国際交流協会で聞いた「日中関係の四つの基本文書」です。わが会の会員であり、「戦争をさせない1000人委員会」の事務局長である内田雅敏弁護士も同意見でした。「四つの基本文書」を紹介するブックレット、内田雅敏編著『平和資源』としての日中共同声明」を2017年7月7日に発行しました。

日中労交の訪中団は、2015年以降、「日中不再戦の誓いの旅」と銘打って、南京での南京大虐殺犠牲者追悼国家公祭に参加するとともに、哈爾濱、瀋陽、撫順、天津を訪問し、日本軍国主義の侵略遺跡を見学してきました。

あらためて「日中不再戦の誓いの碑」の碑文を読むと、「日本軍国主義の中国侵略戦争を労働者人民の闘争によって阻止しえなかったことを深く反省し」とか「われわれは、日中不再戦、反覇権の決意を堅持し、子々孫々、世々代々にわたる両国労働者階級の友好発展を強化し」などと、私たちにとって重たい課題が投げかけられています。侵華日軍南京虐殺遇難同胞記念館の前館長であった朱成山先生によると「日中不再戦の誓い碑」は600年以上の風雪に耐えられるものだそうです。私は「碑守」として、「アジアと世界の平和を確立するため」、日中労働者の相互理解をはかり、日中友好交流を深化し、両国の平和と繁栄に寄与したいと考えています。

中華全国総工会並びに中国職工海外交流センターのいままでの友誼と連帯に感謝申し上げ、これからも、日中労働者の友誼と連帯をさらに強化するために共に活動していきたいと思っています。

<資 料>

「日中不再戦の誓い」の碑

<碑の表面>

誓い

われわれは1931年および1937年を契機とする日本軍国主義の中国侵略戦争を労働者人民の闘争によって阻止し得なかったことを深く反省し、南京大虐殺の犠牲者に対して心から謝罪するとともに、哀悼の意を表し、ご冥福を祈ります。

われわれは、日中不再戦、反覇権の決意を堅持し、子々孫々、世々代々にわたる両国労働者階級の友好発展を強化し、アジアと世界の平和を確立するため、団結して奮闘することをあらたに誓います。

公元1985年8月15日

抗日戦争及びファッショ戦争勝利40周年記念日

日中労働者交流協会会長市川誠ら有志の呼びかけによる
南京大虐殺犠牲者の慰霊行事に賛同する有志一同

＜碑の裏面＞

この碑文は市川誠前会長が生前揮毫したものです。

2006年12月吉日 日中労働者交流協会 反戦反覇権の誓い記念碑建設実行委員会
代表吉岡徳次 事務局長平坂春雄

日中友好労働者シンポジウム（2018年8月28日）

日中労働者交流協会と中華全国総工会の 交流の歴史及び活動

伊 藤 彰 信

（日中労働者交流協会会長）



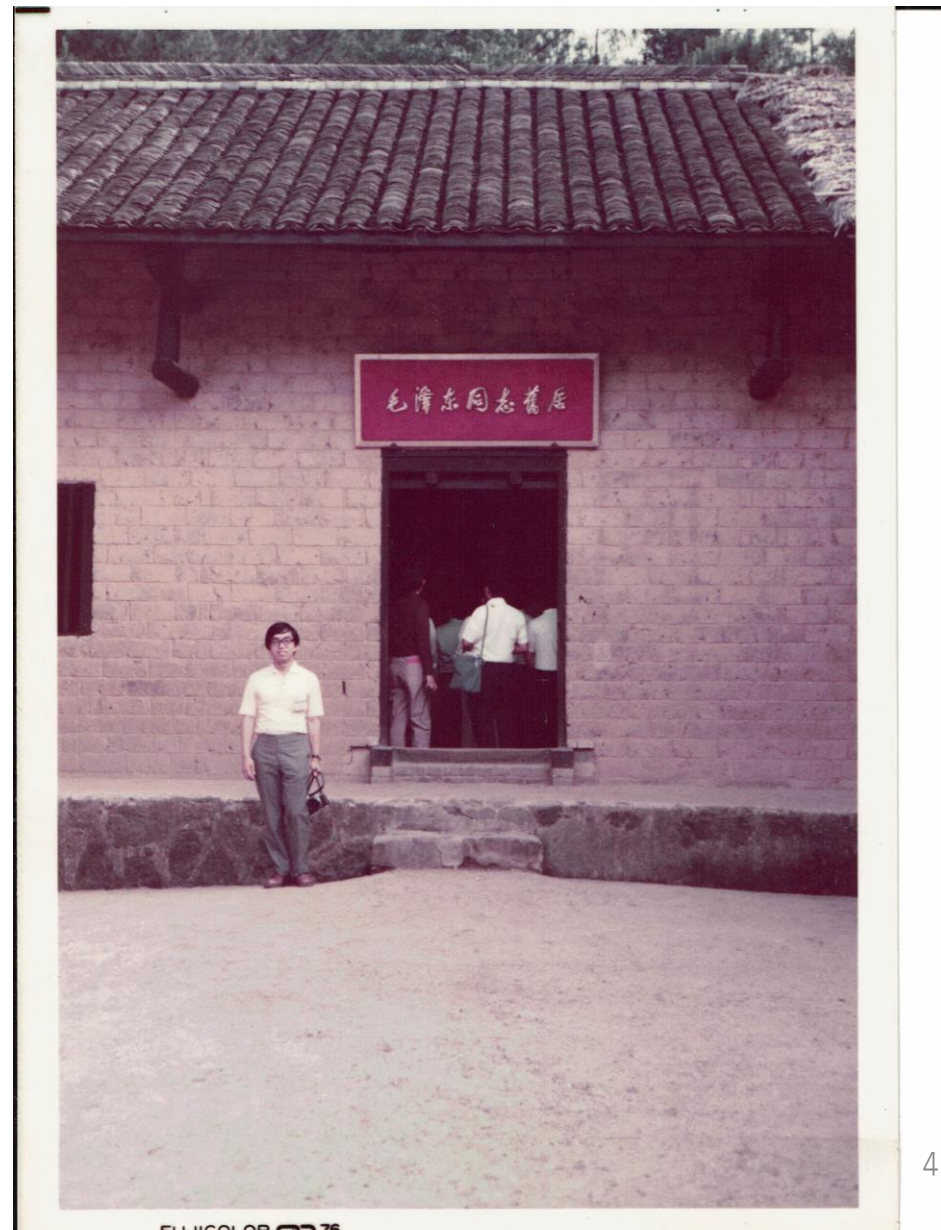


兼田富太郎全港湾委員長と日赤の看護師さん
在中日本人帰国船の第一船「興安丸」の船上で（1953年3月）

在日殉難烈士劳工記念館（天津市）



はじめての訪中（1976年6月）





中日友好協会副会長張香山先生と交通運輸労働者訪中団との記念写真

第一次中国海員工会訪日団（1978年11月）



11 中国海員工会代表団を迎えた関西地本



遺骨発掘現場を見る

市川誠会長ら

日中労交訪中団

(1985年5月 南京)

朱成山主編

「外人看記念館」

南京出版社 2013年

1985年8月15日，日本日中劳动者交流协会以顾问市川诚为团长、山田顺三、平坂春雄为团员一行三人组成的参观吊慰访问团，专程来南京参加纪念馆揭幕仪式。这是纪念馆开馆后第一个接待的日本友好团体。下面这组照片由日中劳动者交流协会访中团提供。



建馆之初的遗骨发掘现场。左图最前面的是市川诚，原日本劳动组合总评议会议长。

侵華日軍南京大虐殺遇難 同胞記念館のオープンを 報じる日本の新聞

「毎日新聞」1985年9月10日（夕刊）



「日中不再戦の誓いの碑」除幕式

(2009年12月13日 南京)



和平反战誓言碑落成

昨天下午,由日本日中劳动者交流协会捐造的和平反战誓言碑,在侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆和平公园内落成。

“我们深刻反省没能通过劳动人民的战争阻止1931年和1937年日本军国主义发动的侵华战争,对南京大屠杀遇难者表示诚挚的谢罪和哀悼,并为他们祈祷冥福。我们再次宣誓:坚定日中不再战和反对霸权的决心,加强和发展两国工人阶级的世代友好,为建立亚洲和世界的和平而团结奋斗!”这段话,被刻成中、英、日三种文字,永久地印在誓言碑上。新华社/图



日劳动者捐造 和平反战纪念碑昨落成



日本日中劳动者交流协会立碑。

本报讯 昨天,由日本日中劳动者交流协会捐造的和平反战纪念碑在侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆和平公园内落成。

记者看到,这座纪念碑长120cm,宽70cm,在古铜色的碑面上,用中英日三国文字记述着该协会前会长市川诚先生生前所书写的和平反战誓言:“我们深刻反省没能通过劳动人民的斗争阻止1931年和1937年日本军国主义发动的侵华战争,对南京大屠杀遇难者表示诚挚的谢罪和哀悼,并为他们祈祷冥福。”并宣誓:“坚定日中不再战和反对霸权的决心,加强和发展两国工人阶级的世代友好,为建立亚洲和世界的和平而团结奋斗!”

据悉,日本日中劳动者交流协会是日本的工会组织,1985年纪念馆开放之日曾来为30万遇难者追悼默哀,如今该协会在日本募捐了200多万日元。纪念馆馆长朱成山也表示,“通过树立此碑,希望将铭记历史,面向和平的理念传递给来馆参观的中外观众,希望中日两国人民世代和平友好。”

杨娟 王斐 戚庆燕/文
宋娟/摄



全港灣青年訪中團（2005年5月）

映画「ジョン・ラーベ」の自主上映会

(2015年7月20日 東京)



(左) ポスター

(上) 上映会を報じる東方新聞

「『平和資源』としての日中共同声明」
を発行（2017年7月7日）



著者の内田雅敏弁護士



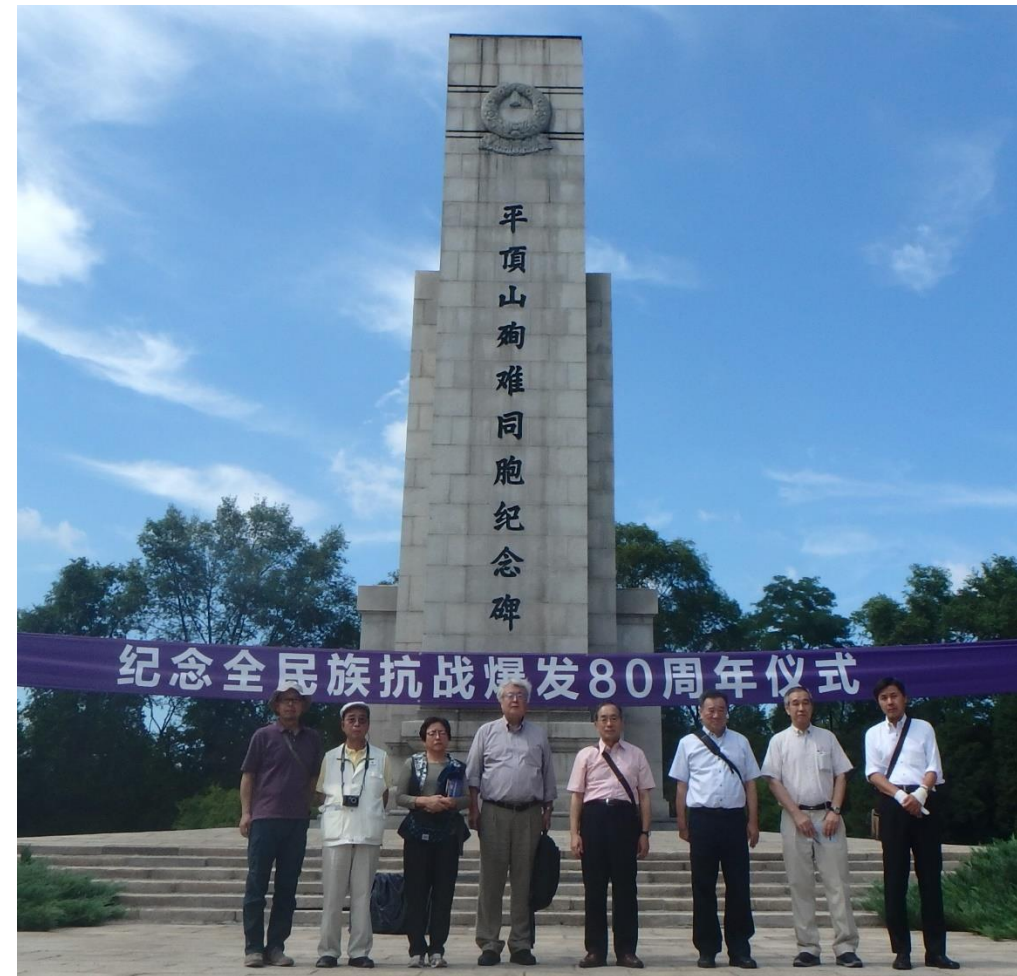
南京大虐殺死難者

国家公祭に参列



日本軍国主義の侵略遺跡を見学







中国職工対外交流中心秘書長彭勇先生と固い握手